

第19回ヨーロッパスポーツ科学学会 (ECSS) に参加して

Participating in the 19th Annual Congress of the European College of Sports Science

手島 貴範

Takanori TESHIMA

I. はじめに

2014年7月2日から5日までの日程において、第19回ヨーロッパスポーツ科学学会 (ECSS 19th annual congress of European college of sport science) が開催された。筆者らは、オランダ・アムステルダムにおいて開催されたこの学会大会に参加したので報告する。

ECSS (European College of Sport Science) は、ヨーロッパのみならず、世界中から体育・スポーツ科学の研究者が集う国際学会である。1996年にフランスのニースにおいて最初の学会大会が開催され、今大会で19回目を数えた。ECSS (European College of Sport Science) の年次学会大会である今大会には、ヨーロッパのみならず世界75カ国から2760名が参加し、1908題の演題が発表された。また、今大会は、ECSSの歴史の中で、2番目に大きな規模の大会とのことであった (表1)。今大会の会場は、アムステルダムの中心街から少し離れた場所に位置する巨大なコンベンション施設である Amsterdam RAI Convention Centre で行われた (写真1、2)。筆者の所属する研究室からは、筆者のほかに、角田直也教授 (体育学部)、田中重陽先生 (本学政経学部)、熊川大介先生

(国立スポーツ科学センター) が参加された。



写真1 発表会場の Amsterdam RAI Convention Centre①



写真2 発表会場の Amsterdam RAI Convention Centre②

表1 過去のECSS学会大会における開催国、開催都市及び参加者数

開催回	開催年	開催国	開催都市	参加者数
1	1996	フランス	ニース	457
2	1997	デンマーク	コペンハーゲン	661
3	1998	イギリス	マンチェスター	744
4	1999	イタリア	ローマ	1029
5	2000	フィンランド	ユヴァスキュラ	953
6	2001	ドイツ	ケルン	1595
7	2002	ギリシャ	アテネ	1088
8	2003	オーストリア	ザルツブルグ	1559
9	2004	フランス	クレルモンフェラン	1166
10	2005	セルビア・モンテネグロ	ベオグラード	1038
11	2006	スイス	ローザンヌ	2170
12	2007	フィンランド	ユヴァスキュラ	1421
13	2008	ポルトガル	エストリル	2026
14	2009	ノルウェー	オスロ	1732
15	2010	トルコ	アンタルヤ	1584
16	2011	イギリス	リバプール	1937
17	2012	ベルギー	ブルージュ	2104
18	2013	スペイン	バルセロナ	3114
19	2014	オランダ	アムステルダム	2760

II. 発表について

これまで、筆者の所属する角田研究室（身体運動学教室）では、過去のECSS学会大会において多くの研究成果を公表してきた。今大会では、角田直也教授の指導の下、3人の教員が発表を行うことができた。筆者は、学会大会の初日である7月2日のTraining and testing (Soccer)の分野において、「Anaerobic work capacities on 12 min running test and Yo-Yo intermittent recovery tests in collegiate male soccer players. (大学生サッカー選手における無酸素性作業能力に及ぼす12分間走とYo-Yoテストの影響)」という演題で口頭発表 (Mini-Oral)を行なった (写真3)。筆者のセッションは、全てサッカー関連の演題で全てまとめられていたことから、聞き手の注目度も高く、多くの方が発表会場に集まった。また、同時期にサッカーのFIFAワールドカップブラジル大会が行われていたことも影響していたものと思われる。このECSSの学会大会では、大学院生時



写真3 筆者の発表の様子

代から何度もポスター発表させて頂いていたものの、口頭によるプレゼンテーションは初めての機会であった。今大会で採用されていたMini-Oralは、4枚のスライドを2分間でプレゼンし、2分間の質疑応答を行なうというものであった。短い時間の中で、情報を集約し、英語で伝えると言うことは、大変難しい作業であった。発表中、座長

からの質問は、「この研究結果を現場のトレーニングにどのように活かすことが出来るか？」と言うものであった。質問された時は、返答することに精一杯で気づかなかったが、後から考えた時に感じたことは、この質問は、我々体育・スポーツ科学の研究を志す者にとっては、最も重要な課題であると気づかされた。この質問から、我々の研究成果は、「トレーニングに活かすこと、さらにはパフォーマンス（競技力）を向上させられるか？」と言うことにもっと焦点を置かなければならないと改めて感じさせられた。また、セッションの終了後も他の研究者から声をかけられ、発表内容についてコミュニケーションを図ることが出来たことも、今後の研究において大変有意義であった。

同行者の田中重陽先生は、Biomechanicsの分野において、「Effect of crank force and velocity to the anaerobic power output during maximal pedaling」という発表演題を発表された。また、熊川大介先生は、Training and testingの分野において、「Longitudinal growth and development of body height and lower limb muscle thickness in Japanese junior speed skaters」という発表演題を発表され、いずれもE-posterの発表形式であった。このE-posterは、会場内に設置された大画面ディスプレイに発表者のポスターが収められ、参加者が自由に検索・閲覧することが出来るというものであり、それぞれの参加者が自身の研究に近い発表を熱心に検索していたのが印象的であった。

Ⅲ. 19th ECSS annual congress を終えて

今学会では、ヨーロッパのみならず世界中から体育・スポーツ科学の多岐にわたる研究報告がなされ、国際的な研究の動向を確認することができた。会場の至る所で、活発な議論が展開されていたことがとても印象深かった。今回、英語による口頭のプレゼンテーションを初めて経験する機会を戴くことができた。研究内容における自分の主張を正確に伝えることだけではなく、多くの情報を得るためには高い語学力が必要となる。今更ながら、英語による表現力をはじめとしたコミュニケーション能力を更に高めることの重要性を痛感させられたことが強く印象に残っている。今後も更なる精進を重ね、国際学会での発表や国際学術誌への論文投稿にチャレンジしたいと強い思いを抱いた。今学会では、世界中の研究者のみならず、若い大学院生が多くの発表を行っていたことから、可能であるならば、スポーツ・システム研究科の大学院生にも積極的に国際学会での研究発表を行って欲しいと強く感じた。

今回発表させて戴いた研究課題の実施及び今大会の発表・参加に当たっては、日本学術振興会の科学研究費補助金（若手研究（B）：課題番号25750299）の助成を受け、実施することができた。ご協力いただきました教職員及び院生の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



写真4 アムステルダムの町並み（ダム広場）



写真5 アムステルダムの町並み（アムステルダム国立美術館）